

# 雨上がりの川

森沢 明夫 作

(166)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(22)

## 【紫音の話】

わたしは宇宙エネルギーとつながるためのマントラをぶつぶつと口のなかで唱えはじめた。春香の緊張が、頭にのせた手のひらから伝わってくるようだ。

「まずは頭頂部から解放するから、ここに意識を集中してね。宇宙から神聖な白いエネルギーがどんどん流れ込んできて、頭頂部のチャクラの風船が膨らんでいくイメージをするの」

「はい」

「いくよっ」

わたしは少し大きな声でマントラを唱えながら、宇宙エネルギーを少女の頭のとっぺんから勢いよく注入しはじめた。

◇ ◇ ◇

灰色の夕暮れ時――。

薄暗い時間になっても雨足は弱まらなかった。中学生の女の子をあまり遅くまで引き止めているわけにはいかないの、わたしは春香に帰宅を促した。すると素直な少女は「はい」と頷き、赤い傘をさして帰っていった。



一人になると、喉が渴いていることに気づいた。

わたしはテーブルの上の二杯目のアイスティーの飲み残しに口をつけた。溶けた氷で薄まった中途半端な味。

それをすべて飲み終えてもまだ足りず、春香が残した分まで飲んでしまった。

とりあえず喉を潤したわたしは、ふと霊能力を開花させたときの春香の表情を思い出した。

あれは、いわゆる「拍子抜け」の顔だった。

「えっ、これで終わり――ですか?」  
などと言いながら、自分の手をまじまじと見つめたりしていたのだ。

「うん、終わったよ。春香ちゃんね、存在の仕方が変わったんだよ。根本から変わって、宇宙の意識と同調できるようになったの。あ、でもね、変わったからって、急に何でも見えたりできたりするわけじゃないからね。霊能力っていうのは、お花みたいにゆっくりと見えない速度で開花していくのね。力の使い方については、また今度ゆっくりとコツを教えてあげるから」

春香はこの説明に、「あ、はい……」と頷いてはくれたものの、なんとなく物足りなさそうだった。

本当は、もう少し喜んでくれると思っていたのだ――。